

第50回日本小児放射線学会学術集会特集

第50回日本小児放射線学会学術集会を終えて

会長 窪田昭男 (和歌山県立医科大学 第二外科)

はじめに

50周年の記念学術集会として、まず、学術集会の事務局を大阪府立母子保健総合医療センター小児外科・放射線科におき、放射線科部長の西川正則先生、市田和香子先生と窪田からなるプログラム委員会を立ち上げました。

I プログラム作成の基本方針

以下の3点をプログラム作成の基本方針としました。

1. 50周年の記念学術集会として、記念企画を中心としたプログラムとすること
2. 国際化を図ること(海外、特にアジアの近隣諸国の小児放射線科医を講師として招聘するのみでなく、進んで発表しに来ていただけるような学会にする)
3. 小児核医学研究会を日本小児放射線学会と合同開催すること

II 50周年記念プログラム

1. 特別講演 メインテーマは「温故知新」として、これに因んだ特別講演を2題用意しました。
(1)「日本の小児放射線医学50年の歴史」 元当学会理事長の平松慶博先生(元東邦大学大橋病院放射線科教授)にわが国における小児放射線医学の半世紀にわたる歴史を振り返っていただきました。
(2) Acute Abdomen: When to Open the Pandora's Box” アイオワ大学放射線科教授のYutaka Sato先生に急性腹症の画像診断をパンドラの箱にたとえてお話しいただきました。
2. シンポジウム 画像診断を通して最近の発展が目覚ましい小児科・小児外科領域の6つのテーマを取り上げました。モデレーター(座長)をプログラム委員会が指名し、シンポジストはモデレーターとプログラム委員会の一部指名し、一部は公募しました。



左：特別講演をされる平松慶博先生，中：Prof. Myung-Duk Lee (Seoul Catholic University)
右：Prof. In-One Kim (Seoul National University)



懇親会にて：左から森谷聡男先生，野坂俊介理事長，西川正則先生，
Dr. Yutaka Sato，窪田，Dr. Abdul Hanif，窪田由紀，Dr. Graeme Pitcher，
北川博昭理事，Dr. Abdul Aziz

- (1) 急性腹症の超音波診断 —超音波はCTを超えられるか？

座長；河野達夫先生（東京都立小児総合医療センター放射線科），岡崎任晴先生（順天堂大学医学部附属浦安病院小児外科）

基調講演は大阪医大小児科の余田篤先生にさせていただきました。USは放射線被ばくがないこと，ベッドサイドで反復検査が可能であることを差し引いても，画像診断手段としての有用性は高く，急性腹症の診断法としてCTを超えつつあるとの報告でした。

- (2) 新生児・乳児のNeuroradiology —最近の進歩
座長；相田典子先生（神奈川県立こども医療センター放射線科），In-One Kim先生（国立ソウル大学放射線科教授）

基調講演はIn-One Kim先生にさせていただきました。発生学，遺伝学あるいは生化学的知識が要求される新生児・乳児のneuroimagingでは，MRIが第一選択の診断法であることなど，最新の進歩を豊富な症例・画像を用いてお話しされました。

- (3) 小児核医学検査 —こんな時にこんな検査を
座長；小泉潔先生（東京医科大学八王子医療センター放射線科教授），内山眞幸先生（東京慈恵会医科大学放射線科）

基調講演は小児核医学研究会代表世話人でもある小泉潔先生にさせていただきました。

た。前年に整備された「小児核医学検査適正施行のコンセンサスガイドライン」に基づいて，シンポジストの先生と共に小児において核医学検査の有用性が高い疾患についてお話しいただきました。

- (4) 先天性嚢胞性肺疾患の新しい概念と画像診断
座長：黒田達夫先生（慶應義塾大学小児外科教授），前田貢作先生（自治医科大学小児外科教授）

基調講演は「分類試案」として高槻病院小児外科西島栄治先生にさせていただきました。小児呼吸器外科研究会ワーキンググループの先生方にシンポジストをお願いし，小児外科，小児呼吸器科，病理および小児放射線科の立場から最新の知見をご報告いただきました。

- (5) 先天性疾患の胎児画像診断 —今とこれから
座長：左合治彦先生（国立成育医療研究センター周産期・母性診療センター長），桑島成子先生（獨協医科大学放射線科）

基調講演は左合治彦先生にさせていただきました。小児循環器科医に先天性心疾患，小児放射線科医に胎児MRI，骨格CT，小児外科医に先天性形態異常の胎児診断についてお話しいただきました。

- (6) 血管腫・血管奇形に対するIVR最先端
座長：三村秀文先生（川崎医科大学放射線医

学教授), 米田光宏先生 (大阪府立母子保健総合医療センター小児外科)

基調講演は「血管腫・血管奇形の適切な診断体系と集学的診療の重要性」と題して, 大阪大学放射線科の大須賀慶悟先生にいただきました。基調講演とシンポジストの放射線科医, 小児外科医および病理医に今日最も難治性の小児外科疾患と言っても過言でない血管腫・血管奇形に関して最近の知見と集学的診療の重要性についてお話していただきました。

3. “Pediatric Radiology in Action 2014”

従来の Film Reading Session を “Pediatric Radiology in Action 2014” と題して, 日米の放射線科医 (アイオワ大学放射線科教授の Yutaka Sato 先生, 国立成育医療研究センター放射線診療部の野坂俊介先生) と小児外科医 (アイオワ大学小児外科准教授の Graeme John Pitcher 先生, 聖マリアンナ医科大学教授の北川博昭先生) により読影室での画像カンファレンスを再現していただきました。予め四者が症例準備から討論内容まで周到な準備をして下さいました。

4. ランチョンセミナーも, 小児放射線領域で重要な課題をプログラム委員会で取り上げ, その後に演者とスポンサーを決定しました。このことと昨今の社会的事情によりスポンサーは 1 社 (GE ヘルスケア・ジャパン株式会社)

のみになりました。テーマと講師・演題名は以下です。

(1) MRI 検査時の鎮静に関する共同提言から：現場へのメッセージ

座長：相田典子先生 (MRI 検査時の鎮静のガイドライン作成 WG)

講師・演題名：大嶽浩司先生 (昭和大学麻酔科教授) 「なぜ提言が必要か？」

井上信明先生 (東京都立小児総合医療センター救命救急部) 「『安全を創る』～MRI 検査時に鎮静を必要とする子どもたちを護るために～」

(2) 小児 CT 被ばく—日本の現状と最適化の方法
座長：西川正則先生 (大阪府立母子保健総合医療センター放射線科)

講師：宮崎 治先生 (国立成育医療研究センター放射線診療部)

5. 一般演題

一般演題は全て公募し, 示説としました。その理由は, ①放射線学会の発表は画像が中心なので, 画像をじっくり見てもらうことができる示説が発表法として理想的であること, ②若い研修医でも on the spot で熱い討論ができること, ③口演では発表時間の制限があるので, ポスターを会期中貼りだしておいていつでも見てもらえることでした。54 題の応募があり, うち 3 題は国外 (韓国) からでした。



懇親会にて (平成 26 年 6 月 27 日, ポートピアホテル・スカイラウンジ)

藤田之彦先生, 鈴木 豊先生, 窪田, 窪田由紀, 小泉 潔先生, 内山真幸先生



Prof. Abdul Hanif (Dhaka Medical College), Dr. Abdul Aziz (バングラデシュ小児外科学会事務局長) と神戸国際会議場にて, 平成 26 年 6 月 28 日 (窪田の 65 回目の誕生日)



事務局の西川正則先生、
市田和香子先生と
(ポスターのデザインは
後藤徹金沢美大教授)

Ⅲ 感想と反省

- (1) 50周年の記念学術集会として企画したプログラムに対して多くの参加者から称賛の声を戴き、また、主催者としても好意的な反応を感じたことより、成功だったと考えます。
- (2) 国際化を図りましたが、口演および示説発表のパワーポイント(スライド)、ポスターの英語表記の依頼を徹底していなかったことと、諸外国への宣伝が不十分であったことより、国外からの参加者は韓国5名、米国2名、バングラデシュ2名の計9名でした。国際化は成功したとは言えませんでした。参加者の多くは満足であったとの感想を述べられました。
- (3) 小児核医学研究会の協力は得られましたが、合流あるいは共同開催にはまだ時間が必要と思われました。
- (4) 企画プログラムの演者・シンポジストの多くが非会員で、海外からの招聘もあったために費用が嵩んだこと、企業展示・ランチョンセミナー等の収入が想定以下だったこと等のために経済的苦労を強いられました。

Ⅳ 個人的感慨

この学術集会は私個人的にとって非常に感慨深いものがありました。私は、大学卒業後、山岳部の先輩鈴木豊先生の強い薦めによって核医学に進みましたが、学生時代から小児外科を希望していたので、物理や数学の基礎を必要とする核医学に

はじめてから馴染めないものを感じておりました。私が入局した時、当の鈴木先生は既に東海大学に異動されておりました。折から、入局1年目の日本核医学会のシンポジウムが、驚くべきことに「核医学に未来はあるか?」でした。結論は「SPECTが実用化されれば核医学に未来はある」と言うものでした。未来があるかどうかをシンポジウムで議論する核医学に対して馴染めない気持ちを一層強くし、卒業後3年目に小児外科に転科しました。放射線には興味を持っていたので日本小児放射線学会の会員を続けておりましたが、私の最後の主催学会が日本小児放射線学会ということと、小児外科に転科して以来ずっと気になっていた核医学の最近の進歩を大学の1年後輩で1年間核医学教室に同時に籍をおいていた小泉潔先生に基調講演していただいたことは誠に感慨深いものでありました。

私は長い間小児放射線学会に関わって参りましたが、これまで超音波のプロブを一度も手にしたことがありません。放射線科の西川先生が私の代わりに超音波プロブを当ててくれていたからです。私は虫垂炎の手術決定も、穿刺排液の決定もすべて西川先生の超音波を信じて行ってきました。小児外科医の私が主催した50周年の記念学術集会が成功だったと言っていただけなら、それは西川正則先生と市田和香子先生の全面的な協力なしではあり得ませんでした。改めて両先生の長年のご交情と惜しみない協力に対して心から感謝申し上げます。